

京都国立博物館および常盤山文庫所蔵「柿本人麿像」の型とその制作背景

三浦 敬任（東北大学）

京都国立博物館所蔵および常盤山文庫所蔵の「柿本人麿像」（以下本作）は古代より「歌仙」として尊崇された柿本人麿を描いた作例である。従来の研究において、柿本人麿像の基本型は「右手に筆、左手に紙」を持つという藤原顕季の人麿影供と関係するかたちと指摘されてきた。本作はこの基本型より派生した「脇息に凭れ、体をひねり、顔を後ろに向ける」かたちの人麿像と認識されている。近年、「維摩居士像」（京都国立博物館蔵）と表される体のかたちの類似が指摘され、その意図に関する研究が展開を見せている。しかしながら、制作年代や制作者、受容者をはじめ、基本型人麿像との関係、制作の思想的背景など明らかでない点が多く残っている。したがって、本発表では先行研究を踏まえ、本作の特徴的な「脇息に凭れ、体をひねり、後ろを向く」かたちの意図を検討し、さらに、基本型とは異なる本作の制作背景に関して、中世の柿本人麿詠歌論を参考として試論を提示したい。

まず、「脇息に凭れ、体をひねり、後ろを向く」かたちを検討する。このかたちは「維摩居士像」のみならず様々な作品に用いられる型であることが確認できる。13～14世紀成立の絵巻である「西行物語絵巻」（文化庁）や「法然上人絵伝」（知恩院蔵）には庵室より屋外を眺める人物にこの型が用いられる。すなわち、本作の成立した鎌倉時代後半に、この型は「眺めやる」行為を表現するかたちとして描かれたと想定できるだろう。さらに、このかたちは「隠遁者」を表す型の一例であることを指摘したい。「山水屏風」（醍醐寺蔵）の隠士はこの型が用いられ、閑居にて訪れる友を待つ様子で描かれている。加えて、中世和歌における住居空間を詠み出す表現とその特徴である「草庵性」を指摘する論考をとりあげ、「眺めやる」行為と「隠逸」思想の関係を考察する根拠としたい。

次に、「眺めやる」かたちが本作に投影されることの意図について検討する。この型を用いる人麿像は『古今和歌集』所収の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思う」という人麿の詠歌と緊密な関係があると想定される。中世の歌論書『三五記』には「ほのぼのと」の歌は「漕ぎ出て行く舟を、とどまって見やる人物の詠む歌」と示されており、「眺めやる」人麿という文脈に沿う記述と考えられる。また、「明石の浦」という名所から想像されるイメージが「隠逸」や「脱俗」であることを指摘し、「眺めやる」形のもつ「隠逸」性と一致することに言及したい。

以上により本作は「脇息に凭れ、体をひねり、後ろを向く」かたちから、鑑賞する者に柿本人麿の代表歌「ほのぼのと」の歌および「隠逸」を想起させる人麿像であり、柿本人麿像の基本型とは異なり、中世の和歌文化や隠逸思想そして人麿詠歌観が強く反映されて成立した像と結論づけられる。